論　文　要　旨

学位論文題目

Subversive Potential of the Body: Representations of Cosmetic Surgery in Contemporary Anglo-American and Japanese Literary and Visual Texts.
（身体の攪乱の可能性をめぐって―現代英語圏および日本の文学・視覚テクストにおける美容外科表象の考察）

氏名　英　美由紀

１．身体という問題系

長い間物質的所与と捉えられてきた身体を、社会における権力構造や規範を反映する構築物として再定義した近年の思潮は、身体やそれにまつわる現象を、ジェンダーや人種といった社会のヒエラルキーを読み込むことの可能なテクストとして新たに焦点化させ、人文社会諸分野の研究対象にした。ジェンダー化された女性の身体についても同様の観点から問題化され、社会の美的規範に基づいて外見に修正を施すきわめて現代的な身体実践として、美容外科も議論の俎上にあげられることとなった。

２．美容外科に関する理論と表象をめぐって

本論はジェンダーと人種を主要な分析軸としながら、美容外科を扱った議論と表象における半世紀間の変遷を概観し、両者間に一定の呼応を見出している。またとりわけ 21 世紀転換期の文学・視覚テクストに、従来の議論が前提としてきた男/女、白人/有色といった二項対立カテゴリーそのものをさえ攪乱する美容外科手術の潜在的な可能性が模索されていることを指摘している。

身体の外見を社会のジェンダー関係において問題化する視点は、既に 18 世紀末のメアリ・ウルストンクラフトの著作にも見られ、これは後のシモーヌ・ド・ボーヴォワールや、60 年代以降アメリカに牽引された女性解放運動における主張の一部にも連なるが、その後日常の言説実践を通じた権力のあり方がミシェル・フーコーにより提出されたことで、種々の美容実践を施した女性の身体は、非対称なジェンダー規範・秩序が書き込まれた場として批判の的となった。また個人の身体と社会構造間の関係が見直され、前者が抵抗可能な場として模索されるようになると、美容外科手術を含むこれらの諸実践を、女性のエンパワーメントの手段として肯定的に容認する意見が打ち出され始めた。しかし手術の施された身体が、ジェンダーに根ざした権力関係の単なる上書きに帰すのか、或いは交渉もし得るのかという 1990 年代からの議論

は、2000年代前半以降進展が見られなくなる一方、むしろより広範な「身体加工」に、ジェンダー・カテゴリーを攪乱する可能性が期待されるようになった。こうした議論は、ジュディス・バトラーの「パフォーマティヴィティ」やダナ・ハラウェイの「サイボーグ」等の概念に直接間接に負うている。

こうした議論の変遷は、人種に根ざした美の規範についても共通し、アジア・日本の文脈で言えば、従来は欧米の強力な影響のもとに形成されたと考えられていた現代日本の美の規範も、一方的なものではなく、より複雑な様相をはらむものと捉えられるようになり、さらには白人/有色という対立的な人種カテゴリーに基づいた議論に疑問が呈されるようになった。

英語圏を中心に提出されてきた以上のような複数の理論枠組について、本論は代表的な研究者を挙げながら意見の対立をもたらす争点を明確にしている。

文学・視覚等の表象芸術は、フィクションの形式や様々な視覚効果を用い、身体とその変容を比較的自由に（時には現在の医療水準や実現可能性をも超える形で）描くことが可能である性質を持ち、しばしば時代に先駆けて身体の新たなあり方を提示する点で、注目に値する。また英語圏と日本の美容外科表象では、上述のような理論動向を反映するように、身体の外科的な加工の持つ、アイデンティティ・カテゴリーを攪乱する潜在可能性に焦点が当てられるようになってきている。本論では現在までの半世紀に及ぶ表象作品（小説、映画等）の分析を通し、理論の変遷との呼応を見出すとともに、上述のような可能性が、とりわけ近年のテクストに表現されていることを見出している。このことは従来議論の土台をなしていた、ジェンダーや人種といったカテゴリーそのものを文化的虚構として掘り崩すものともなる。一方これらのテクストは単に開放的な側面をのみ提示しているのではなく、身体の加工が遍在するようになった社会において人々が直面することになる新たな困難も描いている。身体はテクノロジーやメディア、消費主義を含む様々な言説が交差する場として、いっそう厳格な権利の対象となっていることは見逃すべきではないだろう。その意味で、身体の攪乱可能性をめぐるこれらのテクストの扱いは両義的であると言える。

３．方法

本論における分析対象は英米、日本の文学・視覚表象領域であり、ポピュラー・テクストを含む。また議論に際しては、医文化史、批評理論、社会学におけるこの分野の先行研究に依拠する、領域横断的な方法を採っている。